

UNESCO/ICSU 共催 世界科学会議
(1999 年 6 月 26 日(土)~7 月 1 日(木) ブダペスト(ハンガリー))

第 2 日(6 月 27 日(日))
フォーラム : 科学、その成果、欠点、チャレンジ

基調講演「科学領域の変革」(要旨)
日本学術会議会長 吉川弘之

高度に体系化された学術的知識とは、疫病や災害といった外から人を苦しめてきた邪悪なるものを人類が克服してきた歴史を映す輝かしい資産である。これまで築き上げてきた知識体系を用いて、我々は新たに出現している問題、環境破壊を解決していくべきである。

しかしながら、近代の邪悪なるものは人の善意にもかかわらず予期せぬところに出現する。環境破壊の本質的な特徴として、環境破壊の原因は人がより安全で快適に暮らせるように絶えず営まれてきた人的活動に起因する、ということが挙げられる。

この新しい近代の邪悪なるものに立ち向かっていくためには、社会的セクター、地理的エリア、学術的領域の個別の努力、ないしはそれらの統合であっても、十分とは言えない。それらの間に動機の共有が確立される必要がある。科学研究においては、関係分野の研究者の研究動機が共有されていなければならない。

この動機の共有を実現するために、科学研究に関する方法として俯瞰型研究プロジェクトを提案する。これは、研究者が研究活動においてより広い観点を得るための有効かつ実践的な方策の 1 つといえるものである。

このプロジェクトの考え方では、研究者は 2 つのグループに分かれて、一方は新しい知識を生み出し、もう一方はそこで生み出された知識が社会に与える影響を分析する。これら 2 つのグループは、単に研究者の専門領域に関する知識を統合するだけでなく、一人ひとりが抱く研究への動機を協調的に変革していくようにして、共に研究するのである。